

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第459号 2020年6月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

「陰徳いんとくを積む」ということ 栗田稔生

朝、校門のところに立っている
 と「おはようございます」と元気
 な声で挨拶してくれる子どもが
 います。とっても気持ちがよく
 あります。さっそく、朝の全校朝会
 の時に、その話をします。

「校長先生が、今朝、校門のこ
 ろに立っていると、2年生の人が
 とっても気持ちの良い挨拶をして
 くれました。きつと、挨拶をされ
 た校長先生だけではなく、挨拶を
 しっかりした2年生の〇〇さんも
 気持ちよかったです。ではないでし
 ようか。実は、この『気持ちいい
 なあ』と思うことはとっても大事
 なことなのです。」

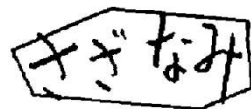
よく、「陰徳(いんとく)を積
 む」といいます。意味は「誰も見
 ていなくても、良い行いをする」

いてきます。そうすれば、自分の
 周りで起こる出来事も肯定的にと
 らえることができるようになりま
 す。友だちに対しても、決して、
 否定的な見方をしなくなり、大き
 な視野で接することができるよう
 になります。そのような経験を積
 み重ねていくことで、自分でこう
 なりたいなあと思ったこと(自分
 が幸せになること)も現実になっ
 てくるわけです。

次の週の全校朝会では、トイレ
 のスリッパを揃えていた1年生の
 話をします。

「校長先生が、休み時間に二階の
 トイレの前を通ると、1年生の〇
 〇さんが、トイレのスリッパを黙
 って揃えていました。誰も見てい
 ないのに、〇〇さんは自分の使っ
 たスリッパだけではなく、そのほ
 かのスリッパも丁寧にそろえてく
 れました。思わず、『〇〇さんえ
 らいねえ。ありがとう。』と声を
 かけました。その後、とっても気
 持ちのよさそうな顔で教室に戻っ
 ていきました。きつと、〇〇さん
 は、誰かに褒めてもらいたいから、
 トイレのスリッパをそろえたので
 はなく、自分が気持ちいいからそ
 うしたのだと思います。」

このような話を続けていきなが
 ら、子どもたちに、わかりやすく
 わかりやすく話をしていきます。
 (大阪市立みどり小学校長)



▼「想像する」をキ
 ーワードにして、数
 人の子と「こわれた
 千の楽器」(野呂さ
 かん作・東京書籍4
 上)を読みました。
 全体を読むというよ
 り、場面ごとに言葉
 の意味を考えると
 う方法です▼まず、始まりの一文
 である「ある大きな町のかたすみ
 に、楽器倉庫がありました」を読
 み上げました(子ども達はどんな
 反応をするのだろうか)と思っ
 て問
 をとりました。「次はどうなるの」
 「続きを考えるの」「楽器倉庫つ
 てなに」と数人でしたが、最初の
 一文でも反応が違います。黙って、
 聞いている子もいます。▼続けて
 二つ目の文章である「こわれて使
 えなくなった楽器たちが、くもの
 巣をかぶって眠っていました」を
 伝えました。「楽器が力を合わせ
 て演奏をするお話なの」と、いき
 なり、お話の主題を考える子が
 います。「修理がでかなのかな」「く
 もの巣をかぶっているから役にた
 たない楽器のおはなしかな」▼子
 ども達の話を聞いてみると、正し
 いと思えることを見つけたことへ
 の思いが強いと感じました。途中
 から、「力を合わせた」「がんばっ
 た」「成功した」という単語はす
 らすら出ます。しかし楽器が力を
 合わせて音を出し合い「一つの楽
 器になる」というその過程が、い
 ろいろな言葉で書いていること
 については素通りでした。▼言葉で考
 えるということは何かを考えた時
 間でした。

(吉永幸司)

学び合うことの大切さ

箕浦 健司

「詩を楽しもう」(光村六年)

本校は、四、五月に計四回の分散登校を実施した。二回目となる登校は、四月後半の一回目から約一ヶ月ぶり。前回は健康・安全面の指導が中心であったが、五月後半、約一ヶ月ぶりに実施した二回目は、六月からの学校再開に向け、子どもたちが国語の学習を楽しみになるようにと考えて授業を行った。めあては、「詩を楽しもう」。

「春の河」では、まず声に出して読んでみた後、「春になると、小さな川々まで、何があふれてゐる」のでしよう。」と問いかけた。子どもたちからは、「タンポポなどの花が咲いています。」

「花の周りを、蝶などが飛び回っています。」

「たくさんの水が流れています。」

「魚が泳ぎ回っています。」

などの意見が出た。

次に、最後に「あふれてゐる」が繰り返されていることの効果を考え、話し合った。ここでは、「本当にたくさんある、ということとがわかる。」

「春の賑やかな様子がわかる。」などの意見が出た。先ほど思い浮かべた情景と反復の効果とが結びつき、多くの子どもたちが納得の表情を浮かべている。

こうして子どもたちの意欲が高まってきたところで、一人ひとり音読発表をすることを告げた。工夫のポイントを確認し、誰もが意欲的に練習に取り組んだ。発表では、想像した情景を思い浮かべながら、互いの音読を聞き合った。

この日の発表では、詩の最後の「あふれてゐる」をどう読むか、ということに着目した工夫が多く見られた。二度目を大きな声で読む、十分に間をとって読む等。友だちの音読に、自然と起る拍手。

指示をせずとも、互いに感想を伝え合う姿。発表に対する心地よい緊張感と、発表を終えたときの安堵の表情。久しぶりに友だちと学ぶことを楽しみながら、詩を楽しむことができた。以下、子どもたちの本時の振り返り。

「同じ詩でも、人によって読み方が違ったので、感じ方は人それぞれだと思いました。楽しかったです。」

「〇〇さんの声の大きさや間の取り方などがとても上手でした。私も見習いたいです。」

教室では、当面の間席と席の間隔を可能な限り空ける配置となる。また、子どもたちが顔を近づけたり、長時間話し合ったりする活動は制限される。しかし、この日の子どもたちの姿から、子どもたちが互いに学び合うことの大切さを改めて実感した。安全面に十分に注意しながら、子どもたちが国語に親しみながら、学び合い、高め合える学習活動を工夫していきたい。

(長浜市立南郷里小学校)

「変身俳句で夏を詠む

弓削 裕之

「日常を十七音で」(光村五上)

では、できあがった俳句を見直し、よりよいものにする手立てについて記されている。見直して工夫を加えることを「変身」と呼び、「変身」の具体的な方法として、特に①順序を入れ替える ②気持ちや様子を何かにたとえる」の二点を示した。

●順序を入れ替えて変身

・空みあげ おじぞうさまも 花火見る ↓ 花火見る おじぞうさまも 空みあげ

・もうとけた 二口三口 かき氷 ↓ かき氷 二口三口 もうとけた

●気持ちを表す言葉を変身

・きもちいな 浜辺で日焼け い日ざし ↓ うつぶせで 背中を日焼け いい日ざし

●様子を表す言葉を変身

・ひまわりが とても大きく 咲いている ↓ 笑ってる 太陽みたいな ひまわりが

すべり台

Aさんは、母の日のことを俳句にした。

母の日に カーネーションをプレゼント

どのように変身させようか悩んでいたのが、Aさんはどんな気持ちだったのかを聞くと、

楽しみだ カーネーションをプレゼント

と変身させた。Aさんが伝えたかったのは、カーネーションを渡すまでの出来事だということが分かった。「お母さんに渡すまで、カーネーションはどうしていたのですか」と尋ねると、「見つからないうちに、部屋に隠していました」と答えた。「その様子を俳句にしてみたらどうですか」と返すと、Aさんは次のように俳句を変身させた。

こそこそと カーネーションをかくしてる

お母さんにプレゼントを渡すまでのAさんの気持ちや様子が、とてもよく伝わってくる。その日のAさんの日記には、授業のことが綴られていた。

三時間目に俳句を作りました。それを変身させて書くのに時間がものすごくかかってしまいましたけど、いい俳句になったのでうれしかったです。俳句を作るのが好きになりました。

(京都女子大学附属小学校)

作文を書くための取材料
海東 貴利

作文で最も重要なことは取材料である。つまり、書く材料を見つめる力、集める力である。今年度、週に一時間程度の国語の指導時間をいた。指導はおもに字の習熟、作文指導の時間にあてたいと計画した。先日、受け持つ学級で初めて国語の授業を行った。はじめにオリエンテーションを行った後、早速、生活文の作文を書く学習をした。テーマは「はじめての○○」。本の時間のめあては、ようすをよく思い出し、確認した後、「はじめての○○」の○○には、どんなことがあるか、とや家で野菜の種を植えたこと、逆上がりができるようになったこと、など子どもたち一人一人が考えた書きたいことは様々。この全体発表の場では、子どもたちの書いた児童が発表をしたあと、教師が質問したり感想を話したりして、じっくりと子どもたちとやりとりをした。

定遊具をつかった運動遊びをして、棒のつもとあり、休み時間も登りに熱心に練習して、到達できるような手が痛くなっても達成できたこと、について話した後、もつとくわしくその時の様子を思い浮かべて、らよいのかから、何を書いたら、そこで、もう少しこの児童と対話して、取材のお手伝いをする。T「てっぺんまで登った時、どんな景色が見えた？」C「うん、何も(ない)」。T「一緒に登り棒を登っていた友だちはいなかったの？」C「いたけど、てっぺんまで登れたのはぼくだけ」。T「は、口で、てっぺんまで登ったとき、じや、てっぺんまで登ったとき、横を見たんだね、いなくて、登れたのは僕だけだったことも書くといいいよ」。T「そんなやりとりをした後、児童はもう一度書き始め、次のような作文を書くことができた。『きのこの休みの時間に、はじめ学校にあるのぼりぼうのいちばん上までいきました。横を見ると、だれもいませんでした。下を見ると、友だちが手をかっついていました。手がいかなかったけど、うれしかったです。』」

(高島市立安曇小学校)

なにがどんな順序で書かれてるかな
「たんぼのちえ」
蜂屋 正雄

初発の感想から 1 時間目は範読の後、感想を書かせた。休校措置の間に家庭学習でかなり読み込んでいる子もいたが、枯れてしまったのではないこと、枯れたと思っただけ、また、伸びていくところに関心を持って、いる子が多く見られた。また、疑問として、「かれたのにまだえいようをもっているのはなぜだろう。」というような、まだ読み取れていないことからくる疑問もいくつか見られたため、その疑問を解決するという形で学習をスタートさせた。

疑問を解決しようとする中で、話が前後して来たため、段落ごとに出来事をはじめからたどって、いこうということになった。キーワードは「どこが」「どうなった」。これは教師が提示した。

① 花が さきます。
花は しぼんで

② (黒く)かわっていきます。
というように、子どもには「どこが」「どうなった」という文に直すことを意識させ、指導者は主語と述語+最小限の修飾語で出来事をわかりやすくまとめることを意識して作業を進めた。とにかく、一文一文を「どこが」「どうなった」とまとめる力をつける時間をとることにした。

③段落で、「休ませる」の主語「なにが」が書いていないことに気づいた。その後の文にも主語のないものがあり、そんな時は、「どうなった。」から主語を想像すればいいことを学んだ。また、理由の文は「どこが」「どうなる」に合わないもので、とばして書いていくことにした。

③段落まで全員が進めていったあと、この作業を家庭学習として課してみた。コロナウイルス対策で小グループでの話し合いによって相互補充ができない分、自分の考えをじっくり掘り下げ、自分の考えをもって授業時間の学習を進められればと考えたからである。子どもたちは、教科書に、「どこが」を丸で囲み、「どうなった」を傍線を引いて、時間経過がわかる言葉は○ではさみ授業に臨んだ。家庭学習でやってこられた子とやってこられなかった子との間で理解の差が大きく出てしまう結果となったが、やってこられた子同士のテンポの良いやり取りに手ごたえを感じることできた学習となった。子どもたち自身から出てきた疑問を考える技能を授業で習得し、家庭学習で使いながら進めていく学習を続けていきたい。

(草津市立矢倉小学校)

緊急 学校大改修とコロナ
伊庭 郁夫

私の母校(高島市立新旭北小学校)の学校運営協議会委員三年目を迎える。本年度の二回目は、緊急で会議が開かれた。新型コロナウイルスへの対応に加えて小学校の大改修が行われるためである。

学習参観では、子どもたちのいきいきとした様子が見られた。運動場からは、休み時間の歓声が聞こえる。教室は、基本一メートルの距離を保って机が配置されている。手洗い場は一つ置きに水道が利用できる。トイレでは、足元に印があり、距離を保って順番を待つ。子どもたちが帰った後は、地元高島晒を使って、ドアノブや手すりなど消毒されるそうである。

水泳は、中止。気になる音楽はハミング等で対応されているそうである。社会科等の見学は視聴覚教材で対応すること。

運動会は午前中のみで実施。修学旅行は、今のところ予定通り実施の方向で進めているそうである。

臨時休校中の対応で目をひいたのが、「分散登校」と「オンラインミーティング」である。

「分散登校」には二つのパターンがあり、一つは地区ごとに登校

日を設定することで、交通安全への対応と教室が密にならないことに対応できる。もうひとつは、曜日による学年登校である。学年や学級のまとまりが生まれる。

「オンラインミーティング」については、事前にパソコンやタブレット等のアンケートを行い、「ズーム」による学習保障をするものである。大きなメリットとして

「先生が自分に話しかけているように感じ楽しかった」「友達と二人で見て、良かった」等の声があったそうである。

学校側では、「授業をする先生」「パソコンを扱う先生」「スクリーンショットを使い、だれが見ているのか出欠を確認する先生」等役割分担がされたそうである。

回数を重ねるごとにオンラインミーティングに参加する子どもが増え、最終的には各学級一、二名程度の子どもが使えなかったそうである。一部の「ズーム」が使えない子どもには、電話対応をされたことであった。

これらは、「校舎大改修」を見据え、他校に比べて学習内容に遅れが生じないようにするための方策であり、先生方の熱意を感じた。

そして、学校大改修工事への対応について、協議した。夏季休業中の授業が実施予定されている。

問題は、大改修で教室が使えないことへの対応である。

七月の補充授業は、中学校の校舎をお借りする。特別教室等十一教室である。特に一・二年生は、中学生用の机や椅子では集中できにくく、自分の机や椅子を運ぶという。夏季の保護者による環境整備作業に加え、「希望(のぞみ)の会」というボランティアサークルがあり、地域をあげての協力体制で対応にあたる。

通学路を変更したり大型バスの利用や学童保育への対応をしたりするなど配慮することが多い。また、中学校と時間設定が異なるため、休み時間の移動が制限され、子どもたちのストレス対応にも気を配る。給食準備から返却までのプロセス等、実際にはその場での適切な対応が求められる。

更に、八月には中学校に加え四年生と五年生は、公民館を使う。公民館には、机椅子が常備されておらず、学びの場所作りから始まる。

また、臨時休業分の授業回復策として、運動会や卒業式を含む数回の土曜授業の実施や放課後授業の実施等様々な取り組みがある。

放課後授業は、何月がいいのかその回数はどうかなど細部にわたる協議があった。

前代未聞の状況である。学校・地域の一体感が求められる。楽しいような給食風景を見ながら学校を後にした。

(社会福祉法人虹の会 支援員)

編集後記

▼五月例会(四百五十八回)は新型コロナウイルス宣言は解除はした直後であり引き続き電子例会にしました。提案者は、「一年間を通して書くこと」(高野さん)、「教室で過ごす時間(書く)活動」(北川さん)、「書くこと」の学習について(三上さん)▼高野さんは、短作文や言葉遊びで「楽しく書く」書くこととの抵抗をなくすことが目標。指導過程は、前時の学習成果を文集にして読ませる。本時の目標設定と学習方法の確認。さらに、作品の交流という「どの子にも」を大事にする指導。学習成果は学年末に個人文集として集大成▼北川さんは、学校再開後休み時間を「ステイクルーム」を合言葉に教室で過ごせる活動として「書く」に着目。さらに、グループ活動が制限されることが予想されるなかで「書いて表現する力を伸ばす」チャンスと捉え、視写や多く書く活動を取り入れる活動を視野に入れた。三上さんは、学習(単元)の指導過程を基本にした学習構想の提案。①相手や目的を意識する段階②相手・目的・意図に応じて、取材し構成を考える段階③表現し評価をする段階。各段階を通して目標にするのは、考えながら書くことを工夫し、伝え合うことを実感できる「学習づくり」である。

▼森さんからの「感想」のメールが配信され充実した時間であった。▼巻頭には、栗田稔生先生より玉稿をいただきました。深謝。(吉永幸司)